

平成 20 年 9 月 8 日

## 学 年 提 案

提案者：京都市立修学院第二小学校 小野 賀代

三谷明久

### 1. 育てたい子ども像

「書かれていることの大体をとらえ、場面の様子に気付きながら読める子」

### 2. 学年でつけたい力

- ア 事柄の順序を考えながら話す力
- イ 大事な事柄を落とさないように聞く力
- ウ 相手や目的を考えながら書く力
- エ 語句や表現に注意しながら読む力
- オ はっきりした発音・発声をする力

### 3. 提案内容

- ア ・朝の会では『テーマ』そったスピーチをする。そのとき、自分の言いたいことを短い言葉でもいいので、必ず入れるようにする。
  - ・話すときは「いつ」「だれと」「どこで」「どのように」「どんな気持ち」を組み立てる。
  - ・スピーチ後は質問タイムを設け、上記で言えなかったことを付け加える機会を作る。対話の形にすることで自然と会話ができる。
  - ・児童の、話したいという思いや願いを高めるために「知らせたい相手」をその場に応じて設定する。「担任の先生」「友達」「家族」「地域の人」など。
- イ ・聞く時の合言葉は『目・耳・心』
  - ・背筋をのばしたよい姿勢で、あいづちを打ちながら聞くようにする。
  - ・わからなかったところは相手に質問をする。
  - ・話し手のよいところを見つけて、それを伝える。
- ウ ・語と語をつなげて簡単な文が書ける。
  - ・短い文でもよいので、自分の伝えたいことを必ず書くようにする。
  - ・読んでもらう相手を想定する。「一年生への手紙」「家族への手紙」「あのねちょう」など。そうすることで書く目的が明確になるとともに、意欲も高まり、語や文を意識しながらいろいろな内容で文が書けるようになる。
  - ・文のはじめと終わり＝「文の簡単な組み立て」を意識した書き方ができるようなワークシートを用意する。
  - ・句読点やかぎの使い方を理解して、文書の中で進んで使うようにする。
  - ・正しく表記する力をつける指導や添削は欠かせないが、児童の、書くことに対する意欲をそぐことがないよう、個にあった十分な配慮をする。
  - ・書いた文を声に出して読むことで読み返す習慣や自己評価の習慣をつけさせる。
- エ ・担任による本の読み聞かせや、友達との情報交換、家庭や地域の支援によって、たくさんの本に親しみ、読書の楽しさを味わえるようにする。
  - ・物語文と説明文では、語の使い方や文の表現にちがいがあることがわかる。
  - ・語と語をつなぐ言葉や文末表現をたしかめることで、時間的な順序や事柄の順序などをつかんで読み進めるようにする。
  - ・ワークシートを利用して学習の見通しを持たせる。
  - ・それぞれの場面や登場人物の心情を自由に、豊かに想像し表現できる場として動作化や劇化などの身体表現を取り入れる。身体と心を伸びやかにすることで、より深く場面の様子や人物の心情にせまれるようにする。
  - ・想像したことと叙述を結びつけることによって、言葉の力を身に付けるようにする。

- オ
- ・口をしっかりと動かして音読を練習する。
  - ・自由に楽しく話すことのできる機会を設ける。話すことに自信がない児童も話せるような、雰囲気作りをする。
  - ・互いの発音・発声のよいところを発見しながら聞きあうことで、その場に応じた「声の大きさや速さ」に気づき、身に付けていけるようにする。

#### 4・現時点までの成果と課題

##### 「話す」

- ・積極性に個人差はあるが、どの児童もみんなの前で話せる。しかし、単語をつぶやくだけや反対に長々と話して要領を得ないなど「伝わるように」話せるまでは十分に至っていない。
- ・「いつ」「だれと」「どこで」は概ね話せるが「どのように」「どんな気持ち」に自分の思いを表現しにくいので語彙や表現法を増やす時間として、読み聞かせや読書を続けていく。
- ・児童には、まず話すことに慣れさせたいと考えている。今は聞き手と話し手が先生、友達といった対一の活動を主にしているが、活動経験を積むことによって話し手と聞き手が対複数となるような活動へと広げていきたい。

##### 「聞く」

- ・聞く姿勢、心構えになるまでに時間がかかる。今後も継続的な指導が必要。
- ・わからないことをそのままにして聞き逃す、ということは少しずつ減ってきたが、わからないことを教師に質問するので、話し手と聞き手の間でやり取りができるようにしていきたい。
- ・少人数ではあるが、話し手のよいところに気づいたり的確を得た質問ができるようになってきている児童が出てきた。

##### 「書く」

- ・「いつ」「だれと」「どこで」は概ね書けるが、様子や気持ちを表す言葉が単語になりがちなので、読書時間を確保することで語彙や表現法を身に付けさせたい。
- ・一年生の早い時期から「あのねちょう」を続けているので、どの児童も抵抗なく文章が書ける。様子や思いを生き生きと表現できる児童も増えてきている。継続は力になる。
- ・表現が単調になりがちな児童には「なにが」うれしいのか「どうして」悲しいのかというように、表現に工夫をさせている。
- ・さまざまな形式のワークシートをすることで、読み方、書き方のいろいろなパターンが身に付けられようようにしたいと考えている。
- ・「あのねちょう」では児童に伸び伸びと思いを表現させたいので、句読点や誤字脱字の添削はしていない。
- ・作文やレポートではきちんとした書き方を身に付けさせるためのチェックは欠かせない。助詞のまちがいや、口語をそのまま記述していることが多い。
- ・書いたものを声に出して読むことで、手直しの必要なところに気づけるようになってきた児童もいるが、担任の支援は欠かせない。

##### 「読む」

- ・学級文庫や図書室の本をよく読んでいる。児童の間で面白い本の情報を交換できるようにもなって、読書の世界が広がりつつある。
- ・物語文と説明文の文章表現のちがいに慣れて、読むことができるようになった。
- ・文章の大きなまとまりがつかめるようになり、順序に従って内容をおさえられるようになってきた。
- ・あらすじをおさえながら読めるが、そこから自分なりの想像を広げたり、叙述と結びつけるというような、自ら進んで読み進めていくという点においては不十分である。
- ・説明文では、接続詞や時間の経過を表す語に着目して読み進めていけるようなワークシート作りをしている。
- ・既習の文章では順序や関係について整理しながら読んだりまとめられるようになったが、初読の文章では順序に従って読み進めることが不十分である。

- ・ワークシートを活用して、一つ一つの語句や表現に注意しながら読む活動を進めていきたい。
- ・児童は動作化や劇化を好んですが、ワンパターンになってしまうときもある。上手に出来ている子の真似をしてしまうことが原因と考える。
- ・児童一人ひとりが自分の感じたことや、思いを伸び伸びと表現できるような雰囲気作りを工夫する。
- ・児童にわかりやすい課題の設定をして、どの子も自分なりの読みが出来るようにしたい。

「発音・発声」

- ・日常会話でも口をしっかりと開けないで話す児童が多く、言葉が不明瞭になりがち。特に音読では、口をしっかりと開けて、動かして読むよう指導している。
- ・書く姿勢、聞く姿勢、話す姿勢がよくない。背筋を伸ばしてこれらのことをするよう指導しているがなかなか身に付かない。家庭での協力も要する。
- ・自分で考えて、適切な声の音量や速さで話すようしているが、場に合っていないときは児童同士で教えあって改善していくように進めている。